やはり彼に研究は向いていない

かんごりん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自身が《星脈世代》だということをあるきっかけから知ることになり、水上学園都市『六花』のどれかに転校することになった八幡。

貰ったパンフレットを見た瞬間に最新設備が揃っているという『アルルカント・アカデミー』に所属することに決め、意気揚々と学園へと向かうが、そこで出会ったのはとんでもない少女だった。

八幡は少女、エルネスタに振り回されながらも平和でぐうたらなぼっち学園生活を送るために必死に努力するのであった。

自分でも気づかない内に数々の少女と出会い、多くの友人を作っていく自分の理想と

は真逆の道へと進んで行っている八幡は果たして目的を果たすことはできるのか!?
途中から俺ガイルのキャラもガンガン絡ませていきますので御期待下さい。
文才なんてありませんが、頑張りますので温かく見守って下さい。

目次

彼は彼女の実験からなんとか逃れる
1
彼は同じ苦労人を訪ねる ―― 10
異名 ―― 17
ＶＳ《歌姫》 ―― 21
チートだろ!? ―― 24
天罰 ―― 29
目標 ―― 38
第８話 ―― 44

彼は彼女の実験からなんとか逃れる

俺の名前は比企谷八幡、今はお気に入りの屋上で飯を食べているところだ。
簡単な自己紹介をしておくなら、俺は水上学園都市『六花』の一つ『アルルカント・アカデミー』に在籍している生徒だ。
前の学校である出来事があってから自分が《星脈世代》だったということが判明し、この学園に去年から転校することになった。
この学園に入るまでは前の学校でぼっち生活を送っていたので、ここでもぼっち生活を送るはずだった。

・・・あの女に見つかるまでは

「あ、いたっ！　はっちまーん、次はこの子と戦ってー」
「げ、エルネスタ」
笑顔で下にゲル状の生物を従えながらあの女ことエルネスタ・キューネはこちらに駆け寄ってくる。

こいつは転校してきたばかりの俺にいきなり話しかけてきた女子だったので、ぼっちでコミュ障だった俺は最初の方はどうすればいいかわからずに戸惑った。
しかし、エルネスタは陽気で快活な性格だったのでそう時間はかからずに打ち解けることができた。
その後はエルネスタに色々とこの学園のシステムについて教えてもらったり、今まで喧嘩も碌にやったことなかったので全く知らなかった戦いの仕方も指導してもらった。
その甲斐あって今では学園生活にも慣れて、ある程度はまともに戦えるようになった。
そう、ここまでは良かったのだ。

・・・・・・ここまでは

「もう実験は懲り懲りだって言ってんだろ！」
俺はエルネスタにそう叫びながら慌てて立ち上り逃げ出す。
「おっと、逃がしませんよー」
俺が逃亡しようとしているのを見たエルネスタはゲル状の生物に何かを命じる。
すると、ゲル状の生物はその見た目からは考えられないような速度で俺の方に迫って

くる。

「嘘だろ!?」

あまりの速さに思わず目を剥き慌ててスピードを上げるが、忌々しいことにそれに合わせて相手のスピードも上がりやがった。

「来るなあぁぁ!」

ほぼ全力疾走に近い速度で逃げているのに追い付いてくる相手にとうとう《星辰力》まで使って学内を駆け抜ける。

途中、他の生徒たちにこの光景を見られるが全員が全員クスクスと笑って「ああ、いつものか」という呟いているを何度も耳にした。

それだけならまだ少し恥ずかしかった程度で済んだのだが、知った顔を目にし、すぐさま俺の状況を理解したそいつが腹を抱えて笑っいるのを見て、殴りたい衝動に駆られる。

（くそ、他人事だと思いやがって、後で覚えてろよ）

振り向いて睨み付けてやろうかと思ったが、後ろにまだゲル状の生物がいるのを確認してしまい慌てて向き直る。

「つーか、お前しつこすぎだろ!」

あまりのしつこさに思わず文句を言うが、相手はそもそも人間じゃないので通じるは

ずもない。

（俺の方はそろそろ体力の限界が近いんだが、あんなのにそもそも体力なんてないだろうな・・・）

どうするべきか悩んでいると、ふとある事を思い出す。

（そういや、あいつって人型じゃなくないか？）

ちらりと背後を窺うと、そこにはやはりどう頑張って見ても人の姿には見えない生物がいた。

俺はその事実に今まで気づかなかった自分に思いきりツッコミたかったが、今はこの状況の対応を優先する。

（どっかその辺に・・・・・・あった）

逃げながらも辺りを見渡し、目的のものがないか探すと、流石はアルルカントすぐに見つかった。

俺はそれを見て思わずにやりと笑みを浮かべ、すぐさま目的地へと直進していく。

その後ろを奴は追ってくるが、この中に入ればこっちの勝ちだった。

俺がその中に入った瞬間、奴と俺を遮るように〝それ〟が現れる。

ガンッ！

俺の思惑通り、奴は突然現れた〝それ〟に対処できずに思いきりぶつかる。
その後も何度も奴がぶつかる音は聞こえるが、一向に目の前の〝それ〟が開く気配はない。
〝それ〟の正体とは、
「まだまだ甘いなエルネスタ、流石のあいつもまさかいつも対策していた〝自動ドア〟を盾にして逃げるとは思っていなかっだろ」
そう、〝自動ドア〟だ。
アルルカントは『六花』の中では変わり種で、研究クラスと実践クラスに分かれており、圧倒的に研究クラスの方が立場は有利だ。
それの影響もあり、ここは設備だけはどこの学園よりも最先端という、まさに理想の環境だ。
俺か？　俺は残念ながら実践クラスの方なんだよ。
俺みたいなひきこもりが何で実践クラスなのかって？　その答えは単純だ。
ーーー研究クラスにいったら毎日のようにエルネスタと顔を会わせてしまうからに決まってるだろ

研究クラスの方ではあいつは普段自分の研究室にいるらしいが、何故かは分からないが俺に興味を持ったらしいあいつは態々そこから出てきて俺のところに来るようになった。

エルネスタはあいつが所属している『彫刻派（ピグマリオン）』では天才としてカリスマ的人気を持っている上に、他の学部からも畏敬の念を抱かれているので『アルルカント・アカデミー』ではあいつを知らない奴なんていないくらいの有名人だ。

ちょっと研究のことになると、頭のネジが何本か飛んでるエルネスタだが、それにさえ目を瞑れば見た目と性格はいい？ために一部の男子から告白されたこともあるらしいが、未だに誰もエルネスタが誰かと付き合ったという話を耳にしたことがないという。

そんなあいつが俺みたいなぼっちニートに毎日のような会いにきたらどうなると思う？

簡単だ、男子共の嫉妬により何度か命を狙われ、女子の一部からは散々詳細について聞かれた。

しかも、そのやり口はアルルカントならではとしか言いようがなかった。

少しだけ例を挙げるとしたら、『彫刻派』の連中のやり口は朝の通学路に〝偶然〟設置

されていた戦闘用ロボットが〝偶然〟起動し、〝偶然〟俺を攻撃してくるものだったし、『獅子派（フェロヴィアス）』の連中なんかは自分達の作った《煌式武装（ルークス）》を裏の連中に金と一緒に渡して、そいつらから攻撃を受けた。

『思想派（メトセラ）』の女子達なんてやばかった、教室に入るなりいきなり洗脳をかけてきたからな。

その他諸々の派閥からも攻撃されてきたが、もちろん全て返り討ちにしてやったが。

だが、長々と続いてそれらもエルネスタに騙されてでた《王竜星武祭（リンドブルムス）》で準優勝してからはなくなった。

エルネスタのスパルタ特訓により、驚く程強くなってしまった俺はそんな大会のセミファイナリストにまでなってしまったのだ。

俺が何故そんな目立つような大会に出た理由は純情な俺はエルネスタに騙されてしまったからだ。

まず、事の始まりはエルネスタの特訓は本当にやばかったことからだ。

特訓方式は至極単純の実戦訓練で、あいつ自身は全く動かないのだが、あいつの作ったパペットはもう本当に人間が反応できるギリギリのレベルで俺をガンガン痛めつけてきた。

だが、あいつ自身が弱いかと言えば全くそうではない。

一度その特訓での恨みを込めて背後から不意打ちしてみたのだが・・・、
「おやおや～、どうしたのかな八幡君？」
とんでもなくニヤニヤ顔で軽んくいなされて、そのままボコられてしまった。
女子にボコボコにされるという経験にしばらく凹んでいたが、その屈辱をバネに俺は強くなった。
その後、自分でも実感できるくらい強くなったと感じた俺がエルネスタに再戦を求めたら、
「いいよー。　じゃあ、この日のこの時間にこの場所に来てね～」
と、言われたので俺はおとなしくそれに従った。
思えばおかしいことだらけだったが、その日の俺はエルネスタと戦うことしか頭になかったために頭の隅に追いやっていたのだ。
明らかに普通じゃない人数の人がいたし、テレビなんかでよく見る顔も沢山あった。
だが、それらの全てを無視してエルネスタから指定された場所に時間ぴったりに着いたら、
「さあ！　やって来ました《王竜星武祭》第一回戦！『アルルカント・アカデミー』の期待の新人、比企谷八幡選手！　序列外ですが、事前情報によると相当な実力者のようです！　どんな戦い方をするか今から楽しみですねぇ！」

そんなアナウンスが流れて来た。

彼は同じ苦労人を訪ねる

「はあっ!?　どういうことだよ！　俺は《王竜星武祭（リンドブルムス）》に出場登録なんてしてないぞ!?」

突然の出来事に脳のキャパシティが一気にオーバーした俺は衆目の前にも関わらずについ叫んでしまった。

しかし、実況は俺のその様子に困惑の表情を浮かべながらも今の状況について説明してくれる。

「『ええと・・・、比企谷選手で間違いありませんよね？』」

「ああ、『アルルカント・アカデミー』所属の比企谷八幡だ。　校章だってここにある」

俺はそう言いながら、胸元の校章をアピールする。

『六花』の校章はその学園の生徒しか身につけれない規則があるので、これで俺が少なくともアルルカントの学生であることは証明できるだろう。

「『・・・はい、照合完了しました。　本人で間違い無いようですね』」

「当たり前だ」

「『ですが、《王竜星武祭》の出場選手リストにしっかりと比企谷選手の名前が登録され

ているのですが・・・』

「なっ!?　一体誰がそんなことを!?」

聞き捨てならないその言葉を聞いて、俺が犯人の正体を聞こうとすると、

「はいはーい、私だよ八幡～」

どこからかそんな聞き覚えのある声が聞こえて来た。

俺はその声を聞いた瞬間に今起こっていることの全ての繋がりが理解してしまった。

思えば、何度も前兆は目にしていたのだ。

エルネスタが何度も釘を刺してきた日付に一分たりとも遅れるなと言われた時間帯に極め付けは指定された場所。

ただ決闘するだけなら学園の演習場でよかったはずなのに態々こんなデカイスタジアムを指定してきたこと。

最近《王竜星武祭》に関する情報が特に多かったこと。

少し考えれば馬鹿でも気づけた筈のことなのだ。

だが、俺は気づけなかった。

その理由は今考えればよく分かる、馬鹿な俺は天才エルネスタ・キューネの掌の上で動いていただけだったのだ。

こんなにヒントが転がっていても全く気づけないようにこの日までの行動をその天

才的な頭脳で俺に悟られない範囲で制限して仕組んでいたのだったーーーーーー

★

「思い出したら腹立って来たな」

俺はそう言いながら目の前でガンガンいっている扉を見据える。

他の学園にも自動ドアはあるが、技術の進歩しているアルルカントは〝人の形〟をしていて、尚且つ〝専用のカード〟を持っていないと開かない仕組みになっている。

扉の周り十メートル内に入れば認証スキャンがされ、異常なしとコンピュータが判断したら扉が開くシステムになっている。

だから、あいつはここには入れないという訳だ。

・・・まあ、カード失くしたら一時的に何処にも入れなくなる上に、面倒な手続きが必要なんだがな

ガンッ！

おっと、どうでもいいアルルカントあるあるなんて置いといて、こいつどうしようか

このゲル状の体からして恐らく作ったのはエルネスタじゃなくて、『超人派（テノーリオ）』の連中だろう。

エルネスタのことだ、どうせ交渉かなんかで手に入れたのを自分好みに改造したんだろ。

今のところあいつらに俺と並走できるようなバケモンを作る力はないはずだし、ずっと俺を追い回してきた時点であいつの嫌がらせに決まってる。

（・・・しょうがねえ、万が一にもないだろうがここで放置して他の奴に迷惑掛かっても面倒だ。　ちゃちゃっと終わらせてパレードんとこにでも行くか）

パレードというのはエルネスタのことで同じく頭を悩ませている苦労人仲間のカミラ・パレードのことだ。

アルルカントの最大派閥の『獅子派（フェロヴィアス）』の会長をやってるあいつは〝だれが使っても強力な《煌式武装（ルークス）》の製作〟を目標に日頃から大量の煌式武装を作っている為に俺はよく試験運用を頼まれる。

律儀な性格をしているパレードは一回一回使った感想を言うだけで報酬をくれるのだ。

前に一度「お前も学生なんだからそんな金に余裕ないだろ、報酬なんていい」と言ったことがあるのだが、返ってきたパレードからの答えはいつも少ない仕送りで生活している俺に格の違いというのを感じさせるものだった。

「いや、少ないとはいえ危険が伴う試験運用をやってもらっているのだからこれくら

い払わせてくれ。　それに煌式武装の製作で貰っている給金も使い道があまりなくて困っていたのだ」
思わず養って下さいと言いそうになったのを寸前で堪えたあの時の俺は褒められてもいいはずだ。
ガンッ！　ガンッ！
さっきから無視してきたが、そろそろ煩わしくなってきたので壊してしまおう。
（こういうタイプはどうせ斬撃、打撃系統は効果ないからなぁ・・・、消し去るか）
そう考えた俺は扉に近づき、扉が開いた瞬間、
「【水玉】」
飛び込もうとしてきたゲル状の生物を玉状にした水で包んでから、
「ほい、圧縮っと」
そのまま玉の大きさを縮めて潰す。
この技は本来なら水中で息ができるように作ったのだが、エルネスタの《疑似人形（パペット）》を相手しているうちにできるようになった。
「さてと、この時間帯ならパレードは自分のラボにいるかな？」
突然押しかけても迷惑かと思ってとりあえず電話してみることにした。
「・・・・・・『私だ、どうした比企谷？』」

流石はパレードきっかり6コール後にでた。
「ちょっと用があるんだが、今ラボにいるか？」
『ああ、いるぞ。　今から来るのか？』
「ああ、そのつもりだったんだが・・・駄目だったか？」
『いや、問題ない。　だが、少し時間をもらえるか？』
「大丈夫だが、どうかしたのか？」
『今は少しばかり散らかっていてな、比企谷が来るのなら片付けておこうと思ってだな』
「俺は気にしないが？」
『こちらが気にするのだ、『獅子派』の会長が来客を迎え入れるのにその場所が汚れていては私に立つ瀬がないのでな』
「パレードがそう言うなら、じゃあ今は一時半だから二時でいいか？」
『ああそれで構わない、すまないな比企谷』
「こっちこそ急にすまないな、それじゃあまた後でな」
『ああ』・・・・・・」
通話が切れた。
その後俺は片手をポケットに突っ込みながら廊下を歩く。

「時間が来るまで暇だな、何しとくか」
誰もいなかったので声に出してみたが、さしていい案は浮かばなかった。
何して時間をつぶそうか悩んでいると、
グゥ～
腹の音が鳴ってしまった。
エルネスタの乱入ですっかり忘れていたが、俺はまだ飯を食ってなかった。
（三十分もあるわけだし、購買で小腹に溜まるものでも買っておくか）
財布を見てみれば、大好物のマッ缶（ＭＡＸコーヒー）も一緒に買ある金額があることに気づき一緒に買おうと決めた。
マッ缶が楽しみになった俺は気分を良くしながら購買へと向かった。

異名

エルネスタのせいで無駄な体力消費をしてしまった俺は少し疲れた体に糖分を求めて購買へと赴いていた。
購買にある自販機を目にし、内心で少しテンションが上がり、嬉々として目的地へと一歩踏み出したところで俺の足はピタッと止まることになった。
（はっ？）
〝そいつ〟を見た瞬間思わず声が出そうになったが、何とか胸中で留める。
目をこすったり、首を振ったりしてこれが夢や幻覚の類であるというありえもしない考えを抱くが、何の問題もないのでやはり現実で間違いないようだ。
だが、普段なら絶対にありえないと思うようなことを一瞬だけでも俺が考えてしまったことも仕方ないと言えるだろう。
大好物のマッ缶を目の前にした俺の足が止まるくらい、苦手度で言えばさっきまで俺に散々嫌がらせしていた〝あの〟エルネスタよりも苦手な奴が見えたからだ。
（・・・なんであいつがここにいるんだよ）
思わず内心で悪態をつきながら俺は奴を見据える。

すると、何の前触れもなくこちら側を向いた奴はさも今気づいたかのような態度をとりながら、不気味に笑ってこちらへと近づいてくる。

「おや？　これはこれは《海宴の魔術師（エーギル）》の比企谷八幡氏ではないですか。きしし、こんなところで奇遇ですねぇ」

「何の用だよ《大博士（マグナム・オーパス）》」

目の前の女の名はヒルダ・ジェーン・ローランズ、『アルルカント・アカデミー』創立以来の天才と言われ、俺が今そう呼んだように『六花』ではその名を知らない者などいないとまで言われる《大博士》という異名を持っている。

特徴は白衣をその身に羽織い、翡翠色の髪をビッグテールにまとめ、アメジストの色の目に眼鏡をかけているところで、この女は《星脈世代（ジェネステラ）》を人類が進化した姿であり、《魔術師（ダンテ）》と《魔女（ストレガ）》はその最たる例であるという思想を持っている。

もちろん、ただその思想を持っているだけならそんな大それた異名は付かない。

この女に《大博士》という異名が付いた最も大きな理由は残忍且つその冷酷な冷酷な性格で《星脈世代》でもないただ女性を《魔女》へと変える実験をしたことだ。

誰も成功するはずのないと思っていたその実験はなんと成功し、今ではその女性は最強の《魔女》になっている。

・・・女に負けるっていうのは男として恥ずかしいことだが、俺もそいつだけには《王竜星武祭（リンドブルムス）》で勝てなかった。

そして、奴が俺のことをそう呼んだように不本意ながら俺にも《海宴の魔術師》という二つ名を持っている。

二つ名とは、ただの《星脈世代》であれば付けられている人物の戦闘スタイルなどで、《魔術師》や《魔女》であれば使う魔術の属性や特徴を元に《〜〜の魔術師》や《〜〜の魔女》という風に名付けられる。

俺の《海宴の魔術師》という二つ名も俺が水を操る《魔術師》だからというのが基になっている。

最初の方こそ俺は厨二病っぽいと嫌がっていたが、今では慣れてそこそこ気に入っている。

そんなことを考えていると、ふと、ある考えに思い至った。

・・・そう言えば何で《海宴》になったんだっけな？

（俺が操る属性は確かに水だ。　少し言い換えて海にするのは分かるが何で宴が付いたんだだったかな）

そう考えてから少し当時を思い出す俺。

少なくとも目の前にいるこの女のことは完全に頭の中から抜け落ちていた。

（確かリューネハイムと戦った辺りだったかな・・・）

ＶＳ《歌姫》

『『さあ！　いよいよ《王竜星武祭（リンドブルムス）》も大詰めです!!　次の対戦カードは《戦慄の魔女（シグルドリーヴァ）》シルヴィア・リューネハイム選手　ＶＳ　《序列外（リストアウト）》比企谷八幡選手です！』』

『『いやー、これは展開の読めない一戦っすよ。《クイーンヴェール女学園》では生徒会長でもあり、序列一位でもある実力は確かなシルヴィア・リューネハイム選手はここまで圧勝で、次の試合もその様に流れが進むのかと思えば、対する比企谷八幡選手は無名であるにも関わらずここまでの試合は全て一瞬で決着をつけているっすからねー』』

そのアナウンスが流れると同時に俺は目の前の女性と向き合う。

艶やかな紫色の髪に息を呑むほど整った顔立ち、華やかで圧倒的な存在感は流石は世界の歌姫様と言わざるをえない。

すると、突然シルヴィア・リューネハイムはこちらにくすりと微笑んできた。

「ふふっ、君が比企谷君かぁ」

「何だ？」

俺はそう仏教面でそう問い返す。

だが、そんな顔とは裏腹に内心では、
（や、やめろよ、そんな素敵な笑顔を向けられたらか、勘違いしちまうだろ）
と、心臓をバックンバックンと言わせていた。
そんな状況で何とかポーカーフェイスを保っていると、歌姫様はまるでこちらの心を見透かしているかのように笑みを浮かべ、
「そんな硬くならないでもいいよ、少し君に興味が湧いたから話しかけただけ」
「・・・世界の歌姫様が俺みたいなぼっちに何の興味が？」
「君が《六花》に編入するって時に少しだけ気になってはいたんだけど、まさかここまで勝ち上がってくるほどの実力者だったなんてね」
「買いかぶり過ぎじゃないのか？」
「ふふっ、そうじゃないと思うけどね・・・それじゃ、時間もないことだし続きは試合終わりでいいかな？」
「あ、ああ？」
唐突の美少女からの誘いに俺の脳はキャパオーバーとなり、思わず生返事をしてしまう。
その美少女であるリューネハイムは「じゃあ、約束ね？」と言いながら片手を上げ、それに応じてポカーンとしていた俺も慌てて片手を上げる。

これは実況に準備が整ったと合図をするためだ。
「『両者準備が整った様です！　それでは《王竜星武祭》準決勝第二試合開始です!!』」
「『漣』！」
俺は開始と同時に後ろへと飛び、前方へと小規模の波を生み出す。
この波自体に攻撃力はないが、低コストで長時間持続しやすいので今までの試合でも使ってこれからのコンボを決めて試合を有利に進めてきたが・・・流石に準決勝ともなると格が違う。
「守護の証たる光の壁よ　周囲へと展開し　迫る全ての厄災を退けて」
それだけのフレーズの短い歌でリューネハイムの周りには光の壁が展開され、俺の『漣』の影響を本人へ与えるのが難しくなってしまった。
（・・・さて、どうやって攻略するかな）
俺はそう思案しながら、障壁を破るべく次の技を繰り出した

チートだろ!?

「ふふ、君の戦い方はここまでの試合で見てきてるからね。　対策は立ててあるよ」
「言ってろ！　『飛沫』！」
俺はリューネハイムの周りの水を操り、水飛沫の弾幕を食らわせる。
「・・・マジかよ」
今までの試合ではこれで決着が着いていたのだがリューネハイムに傷はおろか、光の壁に罅すら入らなかった。
（嘘だろ!?　確かに『飛沫』は牽制程度の技だが、それでも中々の威力はあるのに無傷かよ！）
「少し周りの水が厄介だね。　これでどうかな？」
リューネハイムのその言葉に俺が警戒を強めると、
「渇ききった大気よ　潤いを求め　周囲の恵みを全て吸いとれ　恵みを与えた恩人へと　痛撃を以て　仇と為せ」
「なっ!?　か、『間欠泉』！」

なんとリューネハイムは、俺の『漣』の水を全て吸いとり、その水を凝縮してこっちに射出してきやがった。

そんなことされるとは思ってもいなかったので『漣』に大量の水を使っていたのが仇となり、とんでもない威力となったその攻撃を止めるのに今まで温存していた技の一つを使わされてしまった。

『間欠泉』は《星辰力(プラーナ)》の消費はでかいが、攻撃にも防御にも使える優れものの技だ。

俺が指定した範囲に地面から高温の水を勢いよく噴き出させるという技で、使用する《星辰力》の量を増やせば広範囲攻撃も可能だ。

（ちっ！　先に手札の一つを切っちまったか・・・なら、今度は接近戦で出方を見る！）

瞬時に思考を切り替えプランを練り、片手剣型の煌式武装を起動させ真っ正面から突っ込む。

当然迎撃してくるリューネハイムの銃撃を掻い潜りながら目の前まで接近し、

ガキン!!

振り上げた俺の片手剣型煌式武装と振り下ろされたリューネハイムの銃剣一体型煌式武装が激突した。

「はあぁぁ！」
「らあぁ！」
エルネスタを倒す為に筋トレも欠かさず行い、男である俺なら力負けすることはないだろうとタカを括ってたが、予想外というべきか流石は《序列一位》というべきか、リューネハイムはこの細腕のどこにそんな力があるんだと思うくらいの剛力で俺と拮抗していた。
「我が後方に光あ・・・」
『荒滝』！」
俺とリューネハイムほぼ同じタイミングで次の手を繰り出す。
だが、歌を唱わなければならないリューネハイムより、イメージが固定され、コマンドが少ない此方の技の方が早かった。
「…っ！」
リューネハイムの上空から多量の水が絶え間なく流れ落ち、思惑通りリューネハイムから次の一手と呼吸を奪う。
（どうだ、呼吸できなきゃ歌も歌えないだろ？）
リューネハイムは抜け出そうもがくが、圧倒的水量でまともな身動きがとれないでいる。

『荒滝』、その名の通り指定した範囲に高い威力の滝を生み出し、敵から身動きを奪う強力な技だ。

欠点は《星辰力》の消費が激しいことと、範囲は変更できないうえ、発動までに時間がかかるので相手から回避されやすいから発動のタイミングを見計らわないとただの無駄撃ちになってしまうということだ。

（よし、このまま抜け出される前に校章を・・・）

ドパン！

「水よ霧散せよ！」

「えっ？」

その言葉が紡がれると同時に操っていた水の感覚が無くなるのを感じた。

それと同時にリューネハイムが高速で接近してきたため、一瞬の隙ができてしまっていた俺はまともにできなかった防御もすぐに崩され、至近距離からの大砲とも言える砲撃を食らい、闘技場の壁まで吹き飛ばされてしまう。

「が、ガハッ！」

受け身も取れずに壁にめり込んだ俺は、衝撃から堪らず肺の中に溜まったいた酸素を

全て吐き出してしまう。
そのまま呼吸が整うまでしばらく咳き込み、呼吸を落ち着け、壁からなんとか抜け出すと、目の前に影がさした。
慌てて顔を上げると、そこには全く目が笑っていない笑みでこちらを見つめているびしょ濡れのリューネハイムの姿があった。
（・・・やばいな、これって俺死ぬんじゃね？）
全く言葉を発さずに攻撃すらしてこないリューネハイムを見て、俺は得体の知れない悪寒が身体中を走った。

天罰

「女の子をこんなに濡らすなんていい度胸だね、比企谷君？」
「ば、《万能》のお前と違って俺の属性は《水》なんだから仕方ないだろ!?」
その剣幕に何とか心を折られないように耐えながら、俺は必死にそう言い返した。
だが、説得虚しく逆にリューネハイムの目は据わり、
「ふうん、謝るよりも先に言い訳が出てくるんだ？　・・・これはお仕置きが必要だね」
リューネハイムがそう言い終わると同時に嫌な悪寒が走った俺はその場から思い切り飛んだ。

ドゴォォン！

その爆音と共に発生した爆風によって空中で態勢をずらされた俺は何とか着地の瞬間に受け身を取って不恰好ながらもことなきを得る。
慌てて立ち上がり、爆音の発生源を振り返る。
すると、数秒前まで俺がいた場所には隕石でも衝突したかのようなクレーターが出来

上がっていた。
（・・・解答を間違えたな）
どうやら人間はありえないものを目にした時に的外れなことを考えるらしい。
そんなことを考えながらその場に固まっていると、くるりとリューネハイムがこちらの方を向いた。
・・・自身が持っている煌式武装（ルークス）に青い光を纏わせながら
（め、流星闘技（メテオアーツ）!?）
流星闘技とは、自身の煌式武装（ルークス）に莫大な量の星辰力（プラーナ）を注ぎ込むことによって攻撃力を飛躍的に向上させる技だ。
それを視認した俺は突っ込んで来ると予想し、慌てて立ち上がって構え直すが、
「業火と雷の天秤よ　あの愚か者の罪を測りーーー」
なんと、リューネハイムは流星闘技の星辰力を霧散させ、その場で唱い始めた。
完全に予想外なその行動に俺は対処が遅れる。
「断罪せよ　触れれば業火　退けば雷と！」
やがて、リューネハイムは唱い終わる。
後手に回った俺は攻撃の選択肢を諦め、完全に防御の姿勢を取る。
瞬間、俺とリューネハイムとの距離のちょうど真ん中辺りに巨大な天秤が出現した。

（なんだありゃ？）
普通ならありえない光景だった。
本来なら片方に物を乗せて、もう片方にはそれに釣り合うようにいくつか分銅を乗せることによって物の質量を測るはずの天秤にはそれぞれ炎と雷が渦巻いていたのだ。
当然重さがないその二つが乗っていても天秤は動く訳ない。

だが、今は雷が乗っている方の天秤が下に傾いていた。

その異様な光景に戸惑っていると、突然、
「うおっ!?」
雷が天秤から離れ、俺を攻撃してきた。
俺は慌ててその場から跳び退り、その攻撃は躱す。
しかし、次の攻撃まで躱すことができなかった。
「ぐあああっ！」
一瞬だったが雷が体に帯電し、俺はそのダメージで膝をつく。
帯電の影響で手足は麻痺し、動かそうとしても少し行動が遅い。
だが、やられながらも俺が食らった攻撃の正体はしっかりと見た。

（雷が〝跳ねた〟だと？）
そう俺が食らった攻撃の正体は躱したはずの天秤から飛んできた雷だった。
俺が避けたので地面に直撃するかと思った雷はなんとその場で跳ね、威力が落ちることなくそのまま俺のところに飛んできた。
地面に膝をついた状態で分析する俺に
当然そんな隙を見逃す相手の筈がなく、追撃で射撃が飛んできた。
その攻撃を何とか水で壁を張って防ぎ、よろよろと立ち上がると、
「どう反省した？」
と、遠くからそんなリューネハイムの声が聞こえてきた。
その挑発的な物言いを聞いた俺は自分で言うのもなんだが、不敵な笑みをを浮かべていたことだろう。
「全然？　俺を反省させたいんなら俺を叩きのめしてみろよ歌姫様！」
俺はそうリューネハイムに言い返し、地面に手を触れ、〝仕掛け〟をする
元から負ける訳にはいかなかったが、今のを聞いてカチーンときたぜ。
（大体、女にここまで弄ばれてこのまま黙ってられるかよ！）
そう決意を固めた俺はまだ少し痺れている手足に鞭を打って、動き出す。
すかさず、天秤の上に再発生した雷が俺を攻撃してくるが、

『『絶水』』

俺も今度はそう簡単にはやられない。

雷が当たるコースに水で壁を作って攻撃を防ぐ。

「水じゃ雷は防げ・・・えっ!?」

リューネハイムが煌式武装を腰溜めに構えながら、驚いたような声を上げる。

それもそうだろう、世間一般の認識なら水は電気をよく通す物として知られている。

だが、今回使った水は今まで使用していた威力や量重視の〝ただの水〟じゃない、〝超純水〟だ。

超純水は不純物の全く入っていない水でゴムよりも強い絶縁体だ。

俺が超純水を使った事にまだ気づけていないリューネハイムは驚いたままで攻撃を仕掛けてこない、その隙に俺は試合会場の端に到着し、そこでまた地面に手をついて〝仕掛け〟をする。

終わってからすぐに立ち上がり、今度はリューネハイムの方へと駆ける。

「っ!」

『『線渦』』!」

こちらに気づいたリューネハイムが煌式武装で進行速度を遅らせる為であろう牽制の射撃を放ってくるが、それよりも先に俺が攻撃する。

目の前に作り出した水を渦巻かせながら射出し、リューネハイムの攻撃を全て防ぐ。
その間にも距離は縮み、遂にお互いの煌式武装が届く距離まで接近した。
「ふっ！」
「やあっ！」
煌式武装を逆手に持ち、下段から振り上げる俺と剣道のように上段から思い切り煌式武装を振り下ろしてくるリューネハイム。
奇しくも先ほどと同じ形となった競り合いは今度はすぐに終わった。
「えっ！」
リューネハイムの攻撃を俺は自身の煌式武装を滑らせるようにいなし、そのままリューネハイムの後ろへと駆け抜ける。
そのまま地面に手をつき、最後の〝仕掛け〟をする。
慌ててリューネハイムが振り返ってくるがもう遅い。
『大海原』！」
瞬間、舞台の上に海が出現した。
それは俺とリューネハイムを遮るように出現し、リューネハイムを網の中へと閉じ込めた。
俺は星辰力をごっそりと持っていかれて倒れそうになったが、今度は堪えた。

それから海の中へといるリューネハイムに向けて、勝ち誇った笑みを浮かべる。

設置型の大技、『大海原』

これは俺の切り札で対エルネスタように開発した技だ。

大気中の《万応素（マナ）》と俺の星辰力を大量に使用し、指定した範囲内に海を出現させる技で、星辰力で〝海水〟を生成しているので機械を扱うエルネスタへの嫌がらせはばっちりだし、中に敵を閉じ込めて気絶させることもできる。

この技は特にリューネハイムには効果覿面だろう。

なんせ、水の中では声が通らない。

厳密に言うと声は通るが、水の中で声を出すときに発生する気泡によってかき消されてしまう。

よってお得意の歌も歌えずにリューネハイムは今海の中から抜け出せないでいる。

・・・このまま苦しめるのは可哀想なので、俺は海水を操り、リューネハイムの校章を破壊する。

『シルヴィア・リューネハイム校章破壊（バッチクローン）』

そのアナウンスが流れると同時に俺は技を解除し、倒れそうになったリューネハイム

を支える。
そして、
「残念、反省するのはまた今度だな」
そう耳元で囁いた。
それを聞いたリューネハイムは羞恥からだろう、顔を真っ赤にしながらこちらをキッと睨んでくる。
それに対して、俺が何かを言おうとすると、
『いやー、比企谷選手見事な戦いぶりでしたね！　水を自由自在に操る姿はまさに《海宴の魔術師（エーギル）》！』
『お？　そういえばまだ比企谷選手は二つ名を持っていなかった筈っすよね？　今の良かったんじゃないっすか!?』
『本当ですか!?　なら、今度正式に本人に通達させてもらいましょうか？』
と、何やら実況が勝手なことを言っている。
（おい、やめろよそんな痛い名前！　俺は絶対ゴメンだーーー）
目の前にいるリューネハイムのことをすっかり忘れて、抗議しようとすると、
「うおっ!?」
腕をグッと引っ張られた。

急なことで対処できなかった俺が慌てて振り向くと、
「よかったねぇ、《海宴の魔術師》君？」
悪魔がそこで微笑んでいた。

目標

「……二つ名ってあんな簡単に決まっていいのかよ」
「んっ？　何か言いましたか？」
「何でもねえよ」
思わずボソッと漏らした独り言は目の前の女には聞こえなかったらしく、適当にごまかしておく。
自分の二つ名が決まった経緯を思いだし、思わず苛立っていると、
「随分と長い時間だんまりでしたねぇ？　きし、一体、何を考えていたんですか？」
と、《大博士（マグナムオーバス）》が聞いてきた。
無視をしてもよかったが、その問いのなかに聞き逃せないある単語を聞いた俺は慌てて聞き返す。
「ちょっと待て？　お前今、長い時間って言ったか？」
「ええ、それが何か？」
俺は慌てて時計を確認するが、そこに書いてある時間を見て顔を青くした。
パレートとの約束の時間まで残り十分もなかったのだ。

ここからパレートの研究室まで中々に距離があるので、このままここでのんびりしていたら確実に間に合わない。
俺がすぐさま出口へと向かおうとすると、
「おや、どこかに急ぎのご用がおありで？　きし、それは邪魔してしまいましたね。それでは、またの機会に、きしししし！」
意外にも引き止められず、むしろ謝罪までされてしまった。
俺がその異常事態に思わず足を止め、振り返ると、
いつの間にかあの女の姿はなかった
辺りを見渡すがやはり姿は見えず、時間が押していることを思い出し、疑問とモヤモヤを抱えたまま俺は購買を後にした。

★

ーーー八幡が購買を出て行った後、
自動販売機の陰から女が姿を現した。
女は自動販売機で〝ＭＡＸコーヒー〟を買いながら、不気味に何かを呟いている。
「きしし、《海宴の魔術師》。　本名は比企谷八幡。中学時代までは《星辰力》すら持た

なかった〝ただの一般人〟だったあなたがどうやって《魔術師(ダンテ)》の力まで手に入れたのか・・・・・・。　気になって仕方がありません！　いつかその経緯詳しく調べさてもらいますよ、きし、きししし！」

さも嬉しそうな笑みを浮かべながら、女、ヒルダ・ジェーン・ローランズはその場を去って行った。

★

「ハア、ハア、ハア・・・」

「どうした比企谷？　お前ともあろうものがそんなに息を乱して」

「・・・」

何とか時間ぴったりに研究室に辿り着くことはできたが、走り過ぎたせいで今はまともに喋れもせず、ただ呼吸を整えることだけしか出来なくなっている。

パレートもそんな俺を見て今は何を言っても無駄だと悟ったのか、デスクに置いてあった書類の整理を再開し始めた。

しばらくして、

「・・・ハア、よし。　悪いパレート、もう大丈夫だ」

呼吸を落ち着かせて、ようやく喋れるようになった俺はパレートにそう話しかけると、パレートは書類の整理を止め、くるりと椅子を回転させてこちらを向いた。
「そうか、では要件を・・・いや、聞く必要もないな。　比企谷がここに来るということは煌式武装の調整だろう？」
どうやら一瞬で俺の目的が分かったのか、苦笑しながらパレートは俺に問いかけて来る。
「ああ、そうだ。　お前が創った双剣型の煌式武装、あれ少し出力に違いがあったんだ」
「・・・そうか、気を付けてはいたんだがな。　すまない不具合が生じなかったか？」
俺がそう言うと、パレートは心底申し訳なさそうに聞いてきた。
「いや、普通の奴ならまず気づかないレベルの誤差だ。　むしろあそこまで精巧に出来ているのは俺はすごいと思うぞ？」
これは本当のことだ。
出力に違いがあったと言っても片方がもう片方より威力が低かったというだけで、これも本当に些細な違いだ。
だが、俺がそんなことを態々指摘するのには理由がある。
パレートの目標は〝誰が使っても強力な煌式武装〟を創りだすこと。

これは簡単に言ってしまえば誰が使っても同じ結果になる武器を作り出すということだ。

・・・だが、パレートには悪いが俺はこれは無理だと思っている

もちろん、パレートに技術が足りないとかではない。

まず、武道を少しでも嗜んでいる者なら分かるだろうが、根本的に不可能なのだ。

遠距離系の煌式武装で戦っていた奴にいきなり近距離系の煌式武装を渡して戦え、と言っても全く戦うことができないだろう。

もちろん、一部の例外（バケモノ）を除く

誰にでも使えて強力な武器、それは正しい使い方をすれば自衛の術を持たなかった者には力を与え、心強い〝武器〟となるだろう。

しかし、裏を返せば間違った使い方をすれば誰でも簡単に人を傷つけられる〝凶器〟にもなりえるという物だ。

こんな無茶な目標を意地でも成し遂げようとする理由はパレートの過去に関することが起因しているらしいが、詳しいことは俺も知らない。

知っている奴がいるとしたらそれこそエルネスタくらいだろう。

「ふふっ、すまないな比企谷。　気を遣わしてしまって」

俺がそう考えていると、パレートはそう言いながら自嘲気味に笑った。

おそらく俺が言ったことをお世辞の類だと思ったのだろう。
（他人にも厳しいが、自分にはもっと厳しいパレートは自分を卑下する癖があるからな）
そう考えた俺は励ましてやろうと思い、心の底からパレートを褒めることにした。
「そんなことはないぞ、俺はパレートが一番だ」

第8話

何故だろう、一瞬時間が止まった気がした。
目の前では困惑したように少し顔を赤らめたパレートがいる。
「？」
「・・・ひ、比企谷？」
パレートが何故そんな表情をしているのか分からず俺が首を傾げると、パレートは恐る恐ると言った感じで声をかけて来た。
「どうした？」
「い、いや、今のは一体どういう意味だ？」
パレートにしては珍しく動揺しながら俺に問いかけてくる。
「今の？」
「い、今比企谷が言ったことだ。　そ、それはやはりそういう意味なのか？」
「そういう、意味？」
そのパレートの言葉を聞き、俺は疑問を抱きながらも自分がさっき言った言葉を思い出す。

ーーーそんなことないぞ。　俺はパレートが一番だ。
（ん？）
今、自分の言葉の何かがおかしかったような気がした。
ーーーそんなことないぞ。
違うここじゃない。
ーーーが一番だ。
少し足りない。
ーーー俺はパレートが一番だ。
（これだ！）
自分の言葉のおかしな部分を見つけ出し、満足気に俺は頷く。
だが、満足すると同時にどこがおかしかったのかについて気づく。
（こ、告白みたいになってんじゃねえかぁぁぁ!!!）
そのことに気づいた瞬間、俺は頭を抱えて蹲った。
咄嗟に叫ばなかったのはファインプレーとしか言いようがないが、これでパレートが動揺をしているのにも納得がいった。
（そりゃそうだよなぁ、いきなり俺みたいな奴にこんなこと言われたら何言ってんだこいつってなるよなぁ）

俺はよく人から目が死んでいると言われるし、容姿が良いとは思えない。
そんな奴にいきなり告白紛いのことをされても、迷惑なだけだろう。
そう考えた俺は慌てて頭を下げ、謝罪をする。
「すまないパレート！」
「えっ？」
「どうやら勘違いをさせちしまったらしい」
「勘違い？」
未だパレードは若干理解できてないようで戸惑っている。
俺はそんなパレートに事情を説明した。
「そ、そうだったのか。　・・・すまない、こちらの理解能力不足だったな」
すると、それを聞いたパレートはそう言って申し訳なさそうにこちらに頭を下げてくる。
それを見た俺がいやいや俺の方が悪い、と言うと負けじとパレートもいや私が悪い、などと謙遜しあい、
「・・・ま、まあ。　何が言いたいかっていうとパレートの武器は使いやすいってことだ」
「・・・そ、そうか。　比企谷程の使い手にそう言ってもらえるならそれはありがたい

ことだ」
結局、息切れするまで言い合ってからこのように言いたかったことを言ってこの話は終わった。
「そうだ、比企谷。　お前に一つ言っておこうと思ったことがあったんだ」
「何だ？」
「最近、エルネスタの奴はお前と同じく転入してきた〝天霧綾斗〟に対して興味を持ったらしいぞ」
俺はそれを聞いた瞬間、苦い記憶が蘇った。
「おいおい、本当なのかそれ？」
「ああ、なんでも『星導館学園』にいるスパイに渡していた自作の《擬似人形（パペット）》を全部壊されたらしい」
それを聞いた俺は驚きを隠せなかった。
エルネスタの《擬似人形》はとんでもなく精巧に作られているので壊すのは容易じゃないし、壊す以前にそこそこの実力がないと勝てないレベルの強さを誇ってる。
そのスパイとやらにどんなタイプの擬似人形を渡したのか知らないが、高性能であることに間違いはないはず。
（それを全部壊す、か。　一体どうやったんだ？）

俺の時とは違って転入生が強いってのは確定しているだろうが、その転入生がどんな奴かは気になる。

「パレート」

「天霧綾斗について聞きたいんだな？」

「・・・あ、ああ」

まだ何も言っていないのに一瞬でこちらの意図を理解したパレートのどこが理解力不足なのか真剣にその瞬間考えたが、答えはいつまで経ってもでない気がした。